やまがたの遺跡・史跡めぐり Vol.2

清水城跡（しみずじょうあと）

大蔵村（おおくら）

清水城跡は、最上川をはさんで清水集落の対岸にある。川岸にせり出すような急斜面の上に本丸跡と内堀と土塁（どるい）、その背後に二の丸、さらに47haにおよぶ「二日町」と呼ばれる広大な城下が広がる。

築城は文明10(1476)年、最上家の祖斯波兼頼（しばかねより）のひ孫にあたる成沢満久（なりさわみつひさ）によるといわれる。以来満久は清水姓を名乗る。この地は、庄内の武藤氏や小野寺氏との領地をめぐる戦略的な要地のため、幾度も合戦の舞台となり、5代義高（よしたか）が武藤義増（よします）の軍と戦って討死。跡を継いだ義氏（よしうじ）には男子がなく、最上義光（よしあき）の三男義親（よしちか）が養子となった。義親は以前に豊臣家に近習として仕えていたため、徳川方から最上家の豊臣方への内通を疑われた。その疑いを晴らすために、慶長19(1614)年義光の死後に家督を継いだ実兄の家親（いえちか）に攻められて落城。嫡子義継（よしつぐ）と共に切腹という悲劇に見舞われた。

廃城後約400年を経た今も堀や土塁、曲輪（くるわ）などの施設の痕跡をよく残す。2011年に県の史跡に指定された。静まりかえった城跡は、栄枯盛衰の歴史と戦国大名の悲哀を秘めて佇んでいる。

二の丸土塁手前から本丸方向を見る。

本丸から見た最上川と清水の集落。

外堀と土塁。元は水堀であったという。

二の丸と本丸の間にある内堀と土塁。

本丸跡。

蛇行する最上川と清水城跡全景。
手前が本丸跡。
最上川舟運の要衝を押さえていた
立地がよくわかる。

大蔵村教育委員会
〒996-0212
山形県最上郡大蔵村清水 2620
大蔵村中央公民館
tel:0233-75-2323

やまがたの遺跡・史跡 Vol.2　＜2023 年 2 月刊行＞
発行　公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　〒999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地　tel:023-672-5301
監修　山形県観光文化スポーツ部文化財活用課　〒990-8570　山形県山形市松波二丁目 8-1　tel:023-630-2879
印刷　株式会社 大風印刷　〒990-2338　山形県山形市蔵王松ヶ丘一丁目 2-6　tel:023-689-1111

西沼田遺跡（にしぬまた）

天童市（てんどう）

東北中央自動車道の天童インターチェンジを降りて寒河江方面に向かうと、程なく左手に「西沼田遺跡公園」の案内板が見える。案内に沿って進むと、のどかな田園地帯のただ中に広大な西沼田遺跡公園が広がる。

遺跡は1985年に県営ほ場整備事業の実施に伴い発掘調査され、今から約1,400年前の古墳時代後期の集落跡が姿を現した。見つかった住居跡は12棟。他に高床式倉庫跡1棟がある。遺跡の立地が低湿地だったため、柱などの建築部材や木の道具が豊富に残り多くの新発見があった。当時の農村の様子がよくわかる重要な遺跡として、1987年に国の史跡に指定された。天童市は住居2棟や倉庫を元の場所に復元するなどの整備を進め、2008年に遺跡公園を開園した。

公園を管理するNPO法人西沼田サポーターズネットワークでは、年間を通じて様々なイベントを開催したり、勾玉作りやアンギン編みなどの体験を随時受け付けている。また、「ムラの暮らし復元プロジェクト」として、当時使われていた道具の復元や農作物の栽培実験もしている。

遺跡に立って静かに古墳時代の雰囲気にひたるもよし、イベントや体験を楽しむもよし、訪れた人と遺跡とのかかわりの幅を広げてくれる元気いっぱいなテーマパークだ。

西沼田遺跡公園。広大な敷地のなかに3軒の建物や柵、小川などが復元されている。

西沼田遺跡公園のガイダンス施設「ぬまりん館」。

中では出土した遺物を見たり、勾玉作り体験などができる。

火をたくことは復元した建物を長持ちさせる大切な仕事。

天童市西沼田遺跡公園
〒994-0071
山形県天童市矢野目 3295
tel:023-654-7360
HP:https://nishinumata.or.jp/

稲荷森古墳（いなりもりこふん）

南陽市（なんよう）

稲荷森古墳は赤湯温泉の南方、長岡地区にある赤湯小学校のすぐ南に位置している。周りに比べて小高いこの丘が大型の前方後円墳だと確認されたのは、1977年の測量調査によってであった。翌年から2年にわたり山形県立博物館により発掘調査が行われ、墳丘の成り立ちや作り方などが判明した。

その大きさは、全長約96m、後円部の高さ約9.6mで、山形県では最大、東北でも7番目の規模である。墳丘は、丘陵の端を切り離してその地山を基礎とし、前方部1段、後円部3段に作られている。埋葬の状況はわかっていない。作られた年代は、今から1600年以上前と推定。作られた時からほとんど壊されていないこともわかり、1980年に国の史跡に指定された。南陽市は、この貴重な文化遺産の保存と活用を図るために史跡公園として整備し、今は市民の憩いの場となっている。

古墳の一番高いところに立つと、周囲がぐるりと見渡せる。付近に同じ時代の遺跡も多くあることから、この古墳を作った人物は置賜地域一帯に勢力を持った首長と考えられる。それにしてもこの首長一族、大古墳を築いた一代限りでその後どこに行ったのだろう・・・謎は深まる。

古墳を前に白竜湖・大谷地方向を見る。

上:前方部から後円部を見る。
下:後円部から前方部を見る。

古墳を真上から見る。
前方部(左)に比べて後円部(右)が大きい特徴がある。

南陽市教育委員会
〒999-2232
山形県南陽市三間通 436-1
tel:0238-40-8992

経ヶ倉山経塚（きょうがくらやまきょうづか）

酒田市（さかた）

経ヶ倉山経塚は、中野俣集落の東にそびえる標高474mの経ヶ蔵山の山頂近くにある。一帯の山々は、古くから山岳信仰の聖地としてふもとの人々からあがめられ、また、修験者の修行の場でもあったと伝えられている。

円能寺口から急登のつづら折りの道が続く。足元は滑りやすいところもあるが、道はよく整備されている。途中に「胎内めぐり」や「坐禅岩」など、修験道場の名残りがあった。

普通は80分で山頂に着くと聞いたが、2時間かかってやっと到着。経塚は、山頂南直下の大きな岩を塚に見たてていた。その下部に幅約2m、高さ40cmほどの割れ目があり、奥に甕が見える。

この甕は経筒（きょうづつ）や経典を納めた外容器で、口径22.7cm、高さ53cm、胴径56cm。器表面に丹念にタタキ目が施された須恵器系の陶器だ。作られたのは平安時代後期の12世紀頃とみられる。経筒（げんのう）の中の経典は、すでに朽ちてしまっているという。造営者は、ふもとに経蔵山冷泉寺を開いた源翁和尚(1326～1386)とも伝わるが定かではない。1962年に県の史跡に指定されている。

山頂からは北に鳥海山、西に庄内平野と日本海を見渡せる。眼下に広がる絶景と、経塚を作った人物の深い信仰心が登山の疲れを和らげてくれた。

経ヶ蔵山の遠望。
※山の名称には「蔵」、経塚の名称には「倉」の字が充てられる。

入り口よりも甕が大きい。どうやって中にいれたのだろう？

経塚への入り口にまつられた石仏。昔も今も人々のあつい信仰は変わらない。

鉄柵で囲まれた岩の割れ目の中に経典が納められた甕がある。

酒田市役所平田総合支所
〒999-6711
山形県酒田市字契約場 30
tel:0234-52-3111